



1月20日から3月7日にかけて行われた2年度第27回「城下町水沢のひな人形展」

手前には押し絵の技法で作られたくくり雛、奥には見慣れた雛人形（古今雛）が展示されている。最下段中央左手には猫と手まりなども見られ、多様な題材のくくり雛を見ることができる

奥州遺産

― ときを越え

受け継がれるもの ―

第126回

くくり雛

Ⅱ 市武家住宅資料館ほかⅡ

「くくり雛」は、着物姿の女性や歌舞伎役者などを立体的に形づくった装飾用羽子板でおなじみの「押し絵」という技法で作られた雛人形である。水沢地域では、綿を布でくるむことを「くくる」と言うことからその名で呼ばれ、型紙の上に綿を乗せ、布で包んだ部分を組み合わせ、土谷家寄贈資料には、江戸時代末期の「文久」年号が記され、その頃の製作であることが分かる。その後、水沢の画人・砂金竹香が女性や子どもたちに教え、明治から大正時代に盛んに作られた。

くくり雛の題材には、内裏雛や三人官女、五人ばやしのほか、歌舞伎などがあり、これらの背面には竹などの串がつけられ、木製の台にこの串を差し、ひな壇に飾る。雛人形は本来厄よけを願い生まれた文化で、飾る時にはひな壇に魔よけを期待し緋毛氈を敷く。雛人形を片付ける頃には、この地域でも春がもう間近に迫っている。

広 告